

大橋めぐみ作「一筋の光」

登場人物 林 亮介 (29歳)(大串明弘)
神田美由紀 (29歳)(大橋めぐみ)
桂木浩子 (29歳)(中林真奈)

以上は大学の合唱団の同期生

岡本牧師 (60歳くらい)(小川政弘)
亮介の妻(大串弘美)
レストラン”ファミリア”の店員たち 数名(荒木寛二、荒木寛人、
西崎愛)
友人 A, B

(前編)

(遠くで、店内のざわめき)

亮介 調布店から、こちらの八王子店に異動になりました、林です。よろしくお願
いします。

店員たち (それぞれに)お願いします。

美由紀モノ えっ、亮介...?

亮介モノ 美由紀!

美由紀NA それが、大学時代に付き合っていた、林亮介との7年ぶりの再会だっ
た。

(タイトル)

亮介 お先に失礼します。

店長 お疲れさま。

(ドアの閉まる音。できれば金属系のドア)

亮介 お待たせ。行こうか。

美由紀 うん。

亮介 しかし...驚いたな。こんな所で会う何て。

美由紀 うん...そうだね。

美由紀NA わたしは神田美由紀。大学を卒業して、しばらくデパートに勤めていたけれど、去年両親の勧めでお見合いをし、30歳を目前にして何とかゴールインできそうなので、ホッと一安心の今日このごろ。去年のうちに会社を辞め、来月の式までの間このファミリーレストラン“ファミリア”でバイトをしながら、花嫁修行ってとこだ。彼、林亮介とは、大学時代に所属していた合唱団で知り合い、いわゆる“彼女”だった時期もあったのだ。

(車道の音)

美由紀 だから、一応バイトは5月いっぱいまでの予定なんだけど。

亮介 そうだったのか。おめでとう。

美由紀 ありがと。亮介はどうしてたの？

亮介 まあ普通だよ。外食関係を幾つか変わったけど、とりあえず今はこの“ファミリア・チェーン”に落ち着いてる。おとし結婚してね、これでも今や1児のパパさ。ほら、子供の写真。

美由紀 あ、男の子ね。かわいいい~。

亮介 だろ。10年後には、ジャニーズ入りだぞ。

美由紀 お~、言うなあ。でもさ、何で男の人って子供の写真を定期入れに入れたがるわけ？

亮介 そりゃ、かわいいからに決まってるだろ。

美由紀 は~いいい。でも亮介全然変わんないね。あのころのままって感じがする。

亮介 (懐かしそうに、優しく)...そうかな。

美由紀NA “あのころ”...という言葉を口にした時、わたしはちょうど10年前、亮介と交わした会話を思い出して、ちょっとドキドキした。

(回想、2人が19歳のころ)

亮介(フィルター音)じゃあさ、集合時間が8時に変更ってことで、女の子の方、連絡回しといてくれる？

美由紀 うん。わかった。さんきゅ。じゃ、また…。

亮介(F) (かぶって) ちょっと待って。

美由紀 え、何？

亮介(F) いや、あの…。

美由紀 どうしたの？

亮介(F) うん…。あのさ…。

美由紀 変な林くん。

亮介(F) ああ、いや…聞きたいことがあるんだけど。

美由紀 あー、わかった。「ソプラノの浩子ちゃんって彼氏いるの？」とかいうんでしょ。男子みんな騒いでたもんね。「林は浩子ちゃんに気がある」とか言って。

亮介(F) あれは、彼女がおれたちの間の人気投票で1位になったんで、おれが「確かにかわいいよな」って言ったのを勝手に騒ぎ立ててるだけだよ。

美由紀 そ～お？

亮介(F) おれが今、一番気になってるのは…。

美由紀 …う、うん。

亮介(F) …君だよ。神田さん。

美由紀 え…？

亮介(F) 今、付き合ってる人とか、いるの？

美由紀 え…あ、いや、別に…そんな…(F/O)

(回想終わり)

美由紀NA こうして2人の交際が始まった。それは、19歳のわたしの、遅すぎた初恋だった。でも、大学も3年になると、彼はアルバイトや就職活動で忙しくなり、いつしか2人の関係は終わったのだった。

亮介 お前、何かうれしそうだぞ。

美由紀 ふふ、思い出し笑い。そういえば、浩子もいよいよ結婚よ。

亮介 ほんと？ いつ？

美由紀 5月の終わり。6月にするとミーハーだと思われそうだって。ほら、駅前の駐輪場の裏に教会があったでしょ。あそこでね。そういえば、彼女、クリスチャンだって言ってたよね。…やっぱり気になる？

亮介 ぜ～んぜん。

美由紀 嘘つき。(2人、笑いあう)

亮介 な、美由紀、今日、時間ある？ 飯食ってかない？

美由紀 ...うん。

美由紀NA それから、亮介とは仕事の上がり時間が近い時には、必ずと言っていいほど一緒に帰るようになった。大抵は途中で食事をして、時には、学生の時のように公園を散歩したりもした。

亮介 うっわー。懐かしいなあ、この公園！ 全然変わってないな。

美由紀 ほらほら、こっこの庭園ふうの所も、そのままなんだよ。

亮介 おー、ほんとだ。あれ、でも水が流れてないんじゃないか。

美由紀 この時間は止まってるんだって。覚えてないの？

亮介 ああ、そ～いや、そうだったなあ。何、お前、よく来んの？

美由紀 うん、まあね。

亮介 相変わらず“公園おたく”やってんだな。

美由紀 亮介は、あれから来てないの？

亮介 来ないよ。お前みたいな“おたく”でもヒマ人でもないからなー。

美由紀 その“おたく”ってやめてよ。

亮介 だってお前って、公園でポーッとしてさえいれば幸せ...とか言って。そこから中の公園に連れてかれたもんな、おれ。

美由紀 はは...そうだった。あ、でもさ、今の奥さんとだって、デートとかしたでしょ。だったら...

亮介 美由紀、そんな話やめよう。おれは今お前とデート中なんだぞ。

美由紀 でも...

亮介 あのな、美由紀。ほんと言うとさ、お前に会った時、おれ、めちゃくちゃうれしかったんだ。

美由紀 え...

亮介 あれからさ、家に帰っても気がつくとお前のこと考えてたりして、仕事に来るのも、お前に会えると思うとすごく楽しみで、元気が出るんだ。

美由紀モノ 亮介...

美由紀NA ふと、わたしの右手を、亮介の左手が包み込んだ。何だか、とっても懐

かしくてうれしくて、自分の心臓の音がドクンドクンと聞こえるようだった。それを亮介に知られるのが怖くて、わたしはうつむいた。

亮介 美由紀、これから、こうして会ってくれる？

美由紀NA 一瞬、まだ一度も会ったことのない、彼の奥さんのシルエットが目の前をよぎった気がした。でも、すぐにそれは、彼の左手のぬくもりに打ち消されて…。わたしはうなずく代わりに、その手を強く握り返した。

(結婚行進曲)

美由紀NA 浩子の結婚式の日、とても気持ちのいい天気だった。小さな教会で行われたその式は、とても厳かで、それでいてすがすがしくて、シンプルなウェディングドレスを着た浩子は、とても奇麗だった。

(式後 / 拍手・おめでとうの声)

美由紀 ひろ、おめでとう！ すてきな人だねー。

浩子 ありがと。でも“見かけ倒し”同士だね、とか言われてんの。失礼よね。

美由紀 要するに美男美女のカップルってことでしょ。いいじゃん、わたしも言われてみたいなあ。ルックスに自信のある人は、違うねー。

浩子 (笑)冗談よ、冗談。でも次は美由紀の番だね。

美由紀 あ、うん。そうだね。

浩子 なーによ、あんまりうれしそうじゃないじゃない。

美由紀 …そんなことないよ。何か、まだ実感わかないだけ。

浩子 まあ、そうかもねえ。

美由紀NA でも、実はその時、わたしは本当にうれしいと思わなかったのだ。わたしは、そんな自分に驚いた。しかも次にわたしが考えたことは「結婚したら、もう亮介と今のように会えないのでは」ということだった。

美由紀モノ やだ…わたしたら、何考えてんだろ。それが普通じゃない。今更何を期待してんのよ。

浩子 あ、(呼ぶ)岡本せんせーい。

美由紀NA 岡本先生というのは、さっきまで式の司会をしていた牧師さんだった。年のころは 60 ぐらいだろうか。その先生は、列席していた人たちにこやかに会釈をしながら、こちらに近づいてきた。

岡本牧師 いや、たくさんの方が来て下さって良かったね、浩子さん。大分緊張して
たみたいに見えましたが？

浩子 ええ、もう舞い上がっちゃって。ありがとうございました。先生、こちら、学
生時代の同級生…。

美由紀 初めまして。神田美由紀と申します。

岡本牧師 この教会の牧師をしている岡本です。どうぞよろしく。

浩子 大学の合唱団で、わたしはソプラノ、彼女はアルトにいたんです。

岡本牧師 なるほど。(美由紀に)浩子さんはね、よく教会で特別の集会の時なん
かに、賛美歌を歌ってくださるんですが、すてきな歌声で教会の皆さん
も楽しみにしてるんですよ。

浩子 (照れて)先生。それより、美由紀も来月結婚するんですよ。

美由紀 浩子ったら。

岡本牧師 そうですか！ それは、おめでとう。

美由紀 …ありがとうございます。

岡本牧師 ちょうどいいタイミングで、“一足先輩”が出来ましたね。何でも聞いてみ
るといいですよ。ね、浩子さん。

浩子 先生(笑)

友人A (遠くから)おーい、写真撮るよーい。

友人B (")先生も、早く来て下さいよ。

浩子 行こう、美由紀。

美由紀 …うん。

美由紀NA その時、わたしは、牧師さんや浩子の顔をまともに見ることができな
かった。自分の複雑な胸のうちを見破られそうで、何とも気まずかったの
だ。まるで、逃げるように家に帰ると、わたしは部屋に入ってカギをか
けた。

美由紀MO わたしは…わたしはいったい何をしてるんだろう。ううん、何がしたいん
だろう。本当に結婚したいの？ それとも…。亮介…わたしたちどうな
るの？ わたしは、どうしたらいい？ 亮介…。

美由紀NA わたしは、バッグから携帯電話を取り出すと、メモリに入っていた彼の携
帯電話の番号を呼び出した。

(呼び出し音 / 留守電メッセージ / ビッという電話を切る音)

(再び呼び出し音 / 留守電メッセージ)

美由紀 あの...美由紀です。もし、できたら、電話を下さい。

(ビッという電話を切る音)

美由紀NA でもその日、夕方になってもわたしの携帯は鳴らなかった。わたしは、
訳のわからない寂しさに、胸が押しつぶされそうだった。苦しくて、完
全に冷静さを失っていたのかもしれない。わたしはかすかな期待を込
めて、今度は彼の自宅の電話番号を押していた。

(呼び出し音4回位、かぶって)

美由紀モノ ...亮介...出て。

(受話器上がる音)

美由紀NA やっと電話が通じた。だが聞こえてきたのは、亮介の声ではなかった。

... (前編終わり)

(後編)

(呼び出し音4回位、かぶって)

美由紀モノ ...亮介...出て。

(受話器上がる音)

亮介の妻(フィルター音)はい、林でございます。

(ビッという電話を切る音)

美由紀NA わたしは慌てて電話を切った。受話器の向こうの女性の声は、明らかに
亮介の奥さんだった。

(タイトル)

美由紀モノ わたし...何してるんだろ...(泣きだす)。

美由紀NA その時初めて、わたしは、自分のやろうとしていることに気づき、ハッと
した。“不倫”?...。今の今まで、こんなこと、ドラマの中やごく一部の特
別な人の話だと思ってた。自分には全然関係ない、とんでもない世界
の出来事で、そんなことする人の気が知れないと思ってた。そして、心
の中では“何よ。ただ電話で亮介の声を聞いたかっただけじゃない。そ

れだけのことじゃない。”と必死で打ち消そうとしていた。でも…。

(翌日 / 店内のざわめき / いらっしゃいませ等)

美由紀NA 次の日、店を出ると、亮介が待っていた。

亮介 お疲れ。…あの子、もしかして、ゆうべうちに電話した？

美由紀 あ…うん。

亮介 ごめん。携帯に電話くれたのは知ってたけど。でも、休みの日は電話できないからって言ってあるだろ。

美由紀 …うん。ごめんね。

亮介 どうしたんだよ、一体。

美由紀 ううん…。浩子の結婚式に行ってきた、次は美由紀だねって言われて、ちょっと不安になっちゃって。

亮介 だって本当のことじゃないか。

美由紀 (思わず大きな声で) そうだけど。

亮介 美由紀

美由紀 (小声で) でも、わたし…今は亮介のことしか考えられないの。

亮介 何言ってるんだよ。それは、それ。結婚は結婚じゃないか。

美由紀 亮介…。

亮介 あの子、美由紀。この前言ったことはウソじゃない。いつもお前のことを考えてるし、大切に思ってる。だからってお互い今の生活を壊すことはできないんだよ。落ち着いて考えてくれ。

美由紀 わかってる。わかってるよ。でも仕方ないじゃない。どうしたらいいのよ、わたし。

亮介 今のままでいいじゃないか。それじゃダメなのか、美由紀。

美由紀 そんなの、答えになってないよ。こんな状態で、ほかの人と結婚なんてしたくない。

亮介 美由紀…。

美由紀 ごめん。今日は先に帰る。

(走り去る足音)

亮介 おい、美由紀！

(足音続く)

美由紀NA 亮介の声を振り切り、わたしは駅前のバスロータリーに向かって走った。
ロータリーに着いてバスに乗り込もうとしたわたしを、意外な声が呼び止めた。

岡本牧師 神田さん、神田さんでしょう。

美由紀 えっ？

岡本牧師 (小走りに追いついて) ああ、やっぱり。きのうはどうも。

美由紀 岡本先生...あ。こんばんは。

美由紀モノ 何か...変なところで会っちゃったな。

岡本牧師 お仕事の帰りですか。

美由紀 ええ、まあ。

岡本牧師 そうですか。ご苦労さまです。

美由紀 先生は...？

岡本牧師 わたしは、桂木さん...ああ、きのうの、浩子さんのご主人になられた方ですがね、お見舞いに行った帰りなんです。

美由紀 お見舞い？え、でも、式の時はどこもお悪いようには見えませんでしたけど...

岡本牧師 ええ、まあ、見た目にはそうなんですけど...。実は...。ああ、そうですね。あなたの親友のご主人でもあるし、立ち話も何ですから、よろしかったら少しお寄りになりませんか。

美由紀NA きνού会って、一言二言話しただけの牧師さんの言葉に、なぜ素直に従う気になったのだろう。浩子の結婚式の司会をしてくれた教会の先生ということで、何となく親しさを感じていたのかもしれない。と言うより、この牧師さんに自分の気持ちを聞いてもらいたいという思いが、無意識のうちに働いていたのだろうか。

(茶碗をテーブルに置く音)

岡本牧師 さ、どうぞ。

美由紀 すみません...

岡本牧師 その、浩子さんのご主人なんですけど、元々体の弱い方でね。今までも入退院を繰り返されてるんですよ。これから、浩子さんもお大変になるでしょうけれど、彼女はためらわずに結婚を決心されました。あなたも、

来月がご結婚でしたね。どうですか、準備でお忙しいでしょう。

美由紀 いえ...それほどでも...。あの...少しお話してもいいでしょうか。

美由紀NA 浩子の結婚の話に少し励まされたような気持ちで、わたしは今までのこととを牧師さんに包み隠さず話した。でも岡本牧師は、軽べつした様子もあきれた顔も見せないで、最後まで聞いて下さった。

岡本牧師 そうでしたか。よく話して下さいました。つらかったですね。

美由紀 え？

美由紀NA 思いもよらない牧師の言葉に、わたしの方が驚いた。

岡本牧師 人を好きになるというのは、とてもすばらしいことですが、それに流されて自分が見えなくなってしまうと、道を間違えてしまうことがありますよね。

美由紀 好きだという気持ちに正直になるのは、いけないことなんですか？

岡本牧師 正直に...という言葉には、思わぬ落とし穴があるんですよ。あなたのおっしゃる“好きだという気持ち”とは、つまり亮介さんと一緒にいたいと思う気持ちのことですね。

美由紀 ええ。

岡本牧師 では、あなたは“一緒にいたい”という自分の気持ちに正直になるため、亮介さんに家庭を捨てて自分と結婚してもらいたい...と、そんなふうに考えていらっしゃるんですか？

美由紀 いいえ、そんな大それたことは、考えたこともありません。

岡本牧師 そうですね。“好きだ”という気持ちに正直なのは良いことだと世間ではよく言われますが、だからと言って、何でもしていい...というのは、どうでしょうか。“気持ちに正直に”というのは“気持ちの命ずるままに”ということ、もっとはっきり言うなら、自制心は捨てて、自分の“こうしたい”という気持ちだけに忠実になる、“自分の欲望に流されるままに”生きるということではないでしょうか。

美由紀 わたしが、そうだ、ということですか。

美由紀NA 少しむっとしながら問い返したものの、心の中では、あまりに正確に自分の気持ちを言い当てられて、胸が痛くなっていた。

岡本牧師 それでは、あなたは自分の気持ちひとつ自由にできない...ということに

なってしまいます。少しきつい言い方ですが、自分の欲望の奴隷になってしまっているんです。

美由紀 “欲望の、奴隷”…。でも、自分の気持ちを自由にできる人なんて、いるんでしょうか。

岡本牧師 …そうですね。例えば、浩子さんは自ら選んで苦勞の絶えないであろう結婚の道を選びました。ご両親は、最初かなり反対しておられたんですよ。大事な娘の一生を託す人は、この先、何度病気で入退院をするかわからない、仕事を続けていけるかどうかさえわからない。それどころか、腎臓の一つは全くダメになっていて、今、治療しているもう一つも、これ以上悪くなったら命の保証はないのです。決して“今はこの人が好きだから”という気持ちだけでは、できない決心だったと思います。でもあの人は、自分が失恋して一番荒れていた時に、それは大きな忍耐と愛を持って信仰に導いてくれた桂木さんに、今度は自分がその半身になって生涯添い遂げるように、神様から導きを受けたというんです。牧師のわたしにも、簡単にできることではありません。

美由紀 浩子が…。

岡本牧師 もちろん浩子さんにだって、いろんな迷いや不安はあったと思いますよ。でもあの人は、最善をなしてくださる神様を信頼して、その思いを丸ごと神様に預けてしまった。そして全く自由な心になって、喜んで桂木さんのところに嫁いでいったんです。これが神様を信じる者の、心の自由なんですね。神田さんには初めて聞くお話かもしれませんが、この自由を奪い、自己中心の欲望に自らを縛り付けているものを、聖書では“罪”というんですよ。

美由紀 罪…。

岡本牧師 もしあなたが、これからの人生で、このしつこく頑固な自我に流されることなく、いつも自由でありたいとお考えなら、ぜひ聖書をお読みになって下さい。神様の言葉には、あなたを自由にし、自分の欲望をコントロールできる力があるんですよ。

美由紀 A 話しながら、牧師さんは、テーブルの上においてあった黒い表紙の聖書を手に取った。

美由紀　でも、わたし、大丈夫なんですか。浩子のように信仰も持っていないし、昔から、意志が弱くて、すぐじけてしまうのに…。

岡本牧師　安心して下さい、神田さん。この聖書の言葉を下さった神様は、わたしたちに必ず答えてくださる神様何です。あなたもこの言葉、お聞きになったことがあるでしょう。“求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。”あなたが本当に自分を変えたいと願って、神様を求めるなら、必ずその答えが見つかるはずですよ。

美由紀NA　牧師さんの力強い言葉は、耳からというより、心の底に直接響いてくるようだった。

美由紀MO　(つぶやくように) 答えを下さる神様...そんな方がいらっしゃるなら...わたしにも答えを下さい。わたしを、この泥沼から、自由にしてください。

美由紀NA　まだよくわからない“神様”へのつぶやきめいてはいたが、それは確かにわたしの初めての祈りだった。この気持ちは、そう、厚い雨雲の中から、一筋の光が差し込んできたときに似ていた。この希望の光を、これから求めていこう。それはわたしの、ささやかだけれど“大きな”決断だった。

(後編終わり)